

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370317

研究課題名(和文) アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの進化と「幸福の追求」の未来学

研究課題名(英文) Evolution of Human Enhancement in American Literature and Futuristic Designs of "The Pursuit of Happiness"

研究代表者

渡辺 克昭 (Watanabe, Katsuaki)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授

研究者番号：10182908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ヒューマン・エンハンスメントとは、人間の肉体的、精神的限界を克服すべく技術を駆使し、個人の能力や素質を通常以上に高めたり更新したりすることを意味する。合衆国においてこの志向は顕著であるが、本研究は、現代アメリカ文学に表象されるそうした多様な言説と修辞を探求し、その情動を「幸福の追求」の政治学との関係において分析した。人間の自然への介入に対する抗しがたい衝動をめぐる学際的な広い視座を重視しつつ、本研究は、先端バイオ技術がもたらした欲望と不安の多層的なインターフェイスを緻密に探ることにより、パワーズやデリーロをはじめとする現代アメリカ作家が、独自の倫理的批評をいかに模索してきたかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Human enhancement can be defined as the application of technology to overcome physical or mental limitations of the human, entailing the augmentation and upgrading a person's abilities and aptitude beyond their normal state. This project primarily explores a great variety of discourses and rhetorics with which human enhancement, a quintessential American experience, has been represented in American literature and then analyzes its emotional affect in connection with the politics of "The Pursuit of Happiness." With a special emphasis on a wide range of interdisciplinary perspectives concerning our irresistible urge for intervention in nature, this study elucidates how contemporary American writers such as Richard Powers and Don DeLillo have groped for their own ethical critique, by closely investigating the multi-layered interface between desires and misgivings frontier biotechnologies arouse.

研究分野：現代アメリカ文学

キーワード：ヒューマン・エンハンスメント、ドン・デリーロ、リチャード・パワーズ、幸福の追求、ゼロ K、幸福の遺伝子、ポストヒューマン、現代アメリカ小説

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、とりわけ生命倫理の領域において、iPS 細胞をめぐる再生医療、バイオテクノロジー、脳神経科学などの先端科学技術の利用をめぐって、喫緊の問題系としてエンハンスメント論争が浮上してきたことは注目に値する。ヒューマン・エンハンスメントとは、人工器官など医学的な方法によって治療目的以上に運動能力を増強したり、薬物や遺伝子操作を通じて記憶力や認知能力を高めたりすることがそれにあたる。また、情動耐性や幸福感の現出や共感力の強化といった、人間の主体の根幹に関わることまでもがその射程に入ってくる。

(2) 日本語では「能力増強」、「増強的介入」とも訳されるこの領域への関心の高まりの背景には、ヒトゲノムの解析、遺伝子治療、生殖過程の人工操作、人工知能、ナノテクノロジー等における技術開発が 21 世紀に入って指数関数的に加速し、実用化が進んだことが挙げられる。かつては専ら SF のテーマだった事象が現実のものとなり、不可知のパラダイム転換の特異点にわれわれは今まさに差し掛かるうとしている。

2. 研究の目的

(1) 人間の能力や資質を先端生命科学技術によって標準以上に拡充し、完璧な人間の特質を創出しようとするこの分野の急激な進展に伴い、人文科学においても、得られた知見をいかにフィードバックし、現実に働きかけていくかが喫緊の課題となっている。歴史的に見ても、セルフメイド・マンの哲学と徹底した個人主義を通じて、「幸福の追求」を掲げてきた合衆国では、「より強く、より美しく、より若く、より賢く、より気分よく」といった志向はことのほか強い。

(2) それだけに、合衆国では強烈な期待とは裏腹にその深刻な影響に対する疑念や不安も根強く残る。生命操作時代の人間増強は、機会均等と自助努力の共和国の美德の終焉を意味するのか、あるいはそれこそがアメリカン・プラグマティズムの必然的な到達点なのか。プロメテウスの願望によって理想的なデザイナー・ベビーを育み、リベラル優生学的アメリカン・ドリームを実現することは、「明白なる運命」としてのネオ・アメリカン・アダムの誕生を意味するのか否か、議論の種は尽きない。

(3) 生殖、教育、医療、身体を巻き込んだ人類史上類を見ないパラダイム転換点に、アメリカ文学はいかに向き合おうとしているのか。本研究は、エンハンスメントが惹起する多様な言説と情動の界面を、ネオリベラリズムの「幸福の追求」の政治学との関係において分析し、「文化としてテクノロジー」のあるべき姿を炙り出そうとするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、グローバル化した日常において加速度的に浸透するエンハンスメントへのヴィジョンが、いかに複雑で交錯する情動を発動するか、「幸福の追求」の未来学との関係において、その生成のダイナミズムを丁寧に解きほぐすことにした。アメリカ文学においてエンハンスメントに関わる分野は広範に及ぶので、通時的、共時的に全体像を俯瞰しつつ、限られた期間内で成果を挙げるために、まず次の 4 つの領域を設定した。1 遺伝子操作等、生命のデザインに関わる領域、2 薬物等、精神の補強に関わる領域、3 サイバネティックスや人口知能等、頭脳のデザインや増強に関わる領域、4 人体改造等、身体

のデザインや増強に関わる領域。

(2) さらに本研究では、次の 4 つの問題系、A 生命の道具化と商品化、B リベラル優生学と公平さ、C 人間の不完全性、生の被贈与性、D メタフィクショナルなデザインと暴力性、亡霊性をもう一つの座標軸として設定し、1 ~ 4 の縦系と、A ~ D と横系が織りなす位相に焦点を絞り、人間増強がもたらす高揚感や戦慄といった交錯する情動や言説が、いかにフィードバックし合い、新たな文明の進化の地平を規定するマトリクスとなり得るのか、学際的な視座から考察を進めた。

4. 研究成果

(1) アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの問題系を議論しようとするとき、そうした能力増強への志向の根源には、際限のない「死からの遁走」、もしくは「死の遅延」というさらなる広大な文脈が存在することをひとまず認識しておく必要がある。よって本研究では、若さと進歩を尊び、「生命、自由及び幸福の追求」の権利を国家の基本理念として掲げた合衆国において、作家たちが、不死の「楽園に死す」という死のアポリアに対してどのように向き合ってきたのかという問いかけにまず向き合い、一定の見取り図を作成することから作業を始めた。こうした問題提起は、とりもなおさずアメリカ文学者たちが、おびただしい数の死者に取り憑かれた 20 世紀にいかなる葛藤を覚え、どのような「死のレッスン」を提示してきたのかという論点に繋がっていく。

(2) ヒューマン・エンハンスメントが再希求する「楽園アメリカ」にあっては、すべての事象が、あたかも時間の刻印を被ることなく、現前可能な透明な存在と化す。にもかかわらず、そこでも死は不透明で不可能な通過を要求するアポリアとして立ち現れる。では、アメリカ的想像力は、その分節化困難なエッジをいかに物語世界の創造に活かしてきたのか。この問いに答えるべく、拙著『楽園に死す アメリカ的想像力と死のアポリア』(2016)では、配達不能の郵便さながら「楽園

アメリカ」に滞留し続ける亡霊の声を導きの糸として、Saul Bellow、John Barth、Richard Powers、Steve Erickson、Don DeLillo といった現代アメリカ作家たちに焦点を絞り、彼らが楽園に埋もれた「死」のアポリアとどのように向き合い、そこからいかなるテキストを紡いできたか、「死」をめぐるアメリカ的想像力のしなやかな応答を浮き彫りにした。

(3) 以上の基礎作業を踏まえ、合衆国におけるヒューマン・エンハンスメントをめぐる熱い眼差しを意識しつつ、Richard Powers と Don DeLillo の最近の作品を比較してみると、ある種の共通意識を探り出すことができる。DeLillo の *Point Omega* (2010) は、表題通り、Teilhard de Chardin の唱える進化した人類の叡知の究極点 Omega Point を反転し、それを終末論的な惑星規模のマクロ的時間相において捉え直した問題作である。その前年に発表された Powers の *Generosity* (2009) の副題はまさに *An Enhancement* だが、遺伝子学者によって幸福の遺伝子をもつと憶断された若き留学生の卵子をめぐるバイオ産業とメディアの狂態をメタフィクショナルに描き出したこの小説においても、Teilhard への言及が見られる。Powers が、*Three Farmers on Their Way to Dance* (1985) で言及した「引き金点」を、エンハンスメントの臨界点 Omega Point として捉え直してみると、同年に発表された DeLillo の *White Noise* (1985) をエンハンスメント小説の古典として読み直すことも可能である。*Cosmopolis* (2003) において DeLillo は、サイバー資本を占有し、電脳空間で永遠の生を模索する主人公の苦悩を描出した。一方の Powers もまた、*Gold Bug Variations* (1991)、*Galatea 2.2* (1995)、*Echo Maker* (2006)、*Orfeo* (2014) 等の作品群において、遺伝子操作や人工知能や脳科学が孕む問題系に奥深くメスを入れてきた。さらに視野を拡張すれば、カナダ作家 Margaret Atwood の三部作、*Oryx and Crake* (2003)、*The Year of the Flood* (2009)、*MaddAddam* (2013) もまた、人類存亡の危機と生命操作を考察するうえで格好の素材を提供している。

(4) 本研究のケース・スタディーズの一例は、前述の Richard Powers の *Generosity* である。この作品分析において、ポストゲノム時代に「幸福の追求」の神話がいかに追求され、また脱構築されていくのか、惑星思考の枠組みも視野に入れ考察を進めた。その過程で、なぜこの小説がメタフィクション仕立てでなければならないのか、その必然性を解き明かした。

(5) この作品のタイトルの由来となった留学生 タッサは、アルジェリアからの難民でありながら、まさに幸せの権化というべき存在である。彼女を創作学科で教えるラッセルにとって、周囲を和ませるタッサは永遠の謎である。興味をそそられた彼は、そのアウラの

正体を突き止め、言説化しようとする。彼は、幸福マニュアル本から、「感情高揚性気質」という用語をついに探り当てたが、彼が貼ったこのレットルにより、彼女の運命は大きな変転を遂げることになる。

(6) そこで浮上するのが、本作のメタフィクショナルな構造である。作者が作中人物によって出し抜かれ、プロットが制御不能になるといったお馴染みの仕掛けがこの小説にも見られる。この物語では、そうした「書き込み」を脱構築する構造自体が、人間に予め「書き込み」を施す遺伝子が主体と織りなす危うい関係の隠喩として機能している。その背景には、人類が長い進化の時間相における一つの位相に過ぎず、Giorgio Agamben の言う「剥き出しの生」としてのゾーエでありながら、自らに神のごとく介入するピオスでもあるという厳然たる事実がある。メタフィクショナルなテキストは、このように遺伝子を操作する者/される者の間に生じる摩擦を、作者の意図と作中人物の意思の間に生じる軋轢として描出するのに適している。本作においてそのようなメタフィクショナルなデザインは、二つの次元で設定されている。¹ ラッセルが、自らの作中人物であるかのようにタッサを措定し、彼女を操作したり保護したりしようとする次元。² 幸福の遺伝子の保持者と噂され騒動に巻き込まれるタッサと、それを不安そうに見守るラッセルたちをさらに外縁から見守り、時おり論評を施すべくテキストの顔を覗かせる「私」が語る次元。

(7) タッサが「感情高揚性気質」であるという情報はたちどころにマスコミを通じて増幅され、この類稀な幸福の遺伝子の持ち主は、「創作ノンフィクションの商品へと変貌する」。かくして彼女は、人類の未来にパラダイム転換をもたらす貴重なゲノム情報の保有者として、「ジェン」というコード・ネームをもつメシア的セレブへと祭り上げられる。そのような彼女に熱い眼差しを注ぐのは、ゲノム学者にして企業家トーマス・カートンである。こうした「遺伝子仕掛けの幸福」をめぐる世間の熱い眼差しに対して、タッサは隠することなく、協力的な態度を取る。まさに博士の愛した遺伝子をもつミス・ジェネロシティは、求められるまま、卵子を提供する。その結果、彼女は自らを囚わなくても神話化し、さらなる窮地に自分を追い込んでいく。このように標的にされたタッサの包容力が無尽蔵であればこそ、幸福の遺伝子の商品化のために、彼女が市場によって搾取されてしまうという逆説がここに見られる。

(8) 精神的にも肉体的にも行き詰まり、ラッセルとのカナダへの逃避行によって万策尽きたかのように見えながら、北西アフリカの地霊と化した彼女は、故郷にて幸福の遺伝子の神話を脱構築し、豊饒にして復元力のある

メタフィクショナルな亡霊的存在へと変貌を遂げる。この場面から、初めて彼女と向き合うのは、他ならぬ「私」である。作中人物たちを操作してきたこの「機械仕掛けの神」は、この娘が彼の脚本の枠組みに押し込むにはあまりにも生命力が漲り、復元力があつたことに感嘆する。

(9) 本作の結末は、決して予定調和的な幸福な結末ではなく、そこで提示されているのは、無機物から有機体を経て、人類の誕生、ポストヒューマンの出現までをも見通した巨視的な視座である。これまでタッサがしばしば言及してきた「私たちの家」は、彼女の故郷を指示するのみならず、豊饒にして多様な生成を孕んだ「私たちの惑星」の謂いでもあったのである。金森修が『遺伝子改造』において論じたように、人類が「技術衝迫の遺伝子」をもち、「その技術衝迫が自分のゲノムさえ特別扱いしない」なら、人類が住まうこの地球は、所与のものとしての自然が保持されるエデン的無垢の永遠の棲家では有り得ない。Ted Peters が主張するように、神の創造は決して終わったわけではなくまだ続いており、「創造された共・創造者」としての人間の創造性は、神の創造性と共進するという考え方がもし成り立つなら、「いま存在するすべてのものは、<決定稿>ではなく、いわば仕上げ段階の過渡的な存在であるにすぎない」ことになる。まさにこの文脈において、「書くことは常に書き直すこと」という、ラッセルと「私」が好んで口にするメタフィクショナルな言説が、ゲノム編集との関係において神学的意味を帯びてくる。タッサは、そうした創造行為としての遺伝子の「書く」と「書き直し」の狭間に立ち現れるメタフィクショナルな亡霊だったのである。そのような意味において、アトラス山脈を背景に、「幸福の追求」というオブセッションから解き放たれた彼女は、まさに人類の岐路を占う試金石として、横溢と復元力を惜しげもなく包摂する詩神だったと結論づけることができる。以上の考察は、論文「幸福」のこちら側 リチャード・パワーズの『幸福の遺伝子』に見る横溢と復元力」として、共著『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』(2018)に所収され、出版された。

(10) 本研究を総括するもう一つのケース・スタディーとして取り上げる Don DeLillo の新作 *Zero K* (2016) は、前作 *Point Omega* で展開された人類の進化の極限に明滅する絶滅と深遠な時間といったテーマをさらに掘り下げ、まさに彼の晩年のスタイルを確立した作品である。両作品は、地質学的な無底の時間と、そこに生じる無機的な力をめぐる惑星的想像力を共通の基盤としている。*Zero K* では、未来のナノテクによる器官の再生を期して中央アジアの砂漠の地下に設えられた人体冷凍保存施設に永遠の命を夢見る人々

が眠り続ける。マネキンの群れや黙示録的な映像が氾濫するカタコンベとも見紛うこの秘所は、究極のバイオポリティクスの迷宮でもある。

(11) 本作では、人類の変容すら射程に入れない進化の加速度的な展開よりもむしろ、人新世をも相対化してしまう地質学的な時空におけるポスト・アポカリプティックな人類のありようが焦点化されている。この小説が描く「ポストヒューマン」は、エコ・カタストロフィーを経たのち、生命の本源に回帰し、究極的に不死の生命を享受する新たな人類に他ならない。彼らは人類が絶滅しても再び甦るべく、地下のカプセルの中で凍結されるが、大地の組成をなす無機質的な元素の微粒子に一旦は解体されるかのように、鉱物的な無底の時間に曝される。

(12) 主人公ジェフリーの父で大富豪のロス は、歴史化された限りある命を先行投資として差し出し、脱歴史化された永遠の命を手に入れようとする。人体冷凍保存術が、不老不死に限りなく切迫しようとする究極の人間増強だとすれば、彼の姿勢はバイオキャピタリズムの極致と言ってよい。その根幹をなすのは、歴史や死は人間を規定する絶対的な条件ではなく、操作可能な文化的構築物であるという思想である。この施設、「コンヴァージェンス」においては、永遠の中に生命を凍結しようとする衝動は、未来に向かっての「実存的な跳躍」として捉えられている。かつてノマドたちが行きかった中央アジアの歴史は今や砂漠に埋もれ、究極の生命を保持するプロジェクトが、未来に発掘されるべく地中にて稼働している。そこでは富によって歴史が無化され、過去と未来が交差するかのようにより「非歴史的な人類」が揺籃されている。

(13) ロスは、このプロジェクトに多額の投資を行い、死期の迫った妻アーティスに付き従って施術を受けるべく、息子を伴ってこの施設を訪れる。アーティスは、物静かで不思議な魅力を湛えた女性として、やがてジェフリーの意識に取り憑き始める。元考古学者で、遺跡の発掘にも携わった経験の持ち主である彼女は、皮肉にも、未来に発掘されるべくカプセルに埋め込まれ、眠りに就く。人知れず隆起と陥没を繰り返す大地と人間が渾然一体となって交わるこの地下空間を導く原理こそが、この小説における「アース・アート」の真髄をなしているが、本作には、惑星の壮大な地質学的時間相のみならず、銀河や宇宙への時間相へと読者を誘う言辞が散りばめられている。「コンヴァージェンス」設立の目的の一つは、そうした遠大な時間相をも射程に入れ、遠い未来に、この惑星という「環境と融合する意識を打ち立てる」ことであると説明されている。

(14)「コンヴァージェンス」というこの施設の名称は、それ自体、この小説において複雑なトロープとして機能している。多様な学問領域で用いられるこの言葉は、集中、収斂、収束といった運動を意味する。その一方で、この言葉の語源が「共に向く」であってみれば、それは漸近線のように極限に近接する「運動」が果てしなく続くがゆえに決して収束しないという、脱構築的契機をそれ自体に含みもつ言葉でもある。本作にてこの名は、絶対ゼロ度のように、永遠に実現することのないゼロ度の収束を内包している。この施設が永遠の生との交差を希求しつつも、絶え間なく生成と死滅を繰り返す微細な人体細胞の集積として描かれているのはそのためである。もとより「コンヴァージェンス」とは、解体され冷凍保存された人体の器官が、未来の高度に進化したナノテクによって、分子や細胞単位で繋ぎ合わされ、蘇ることの謂だったはずである。そうした切断と接続のデザインを孕む一方で、この施設には、あらゆる潜在性を含みもつ小宇宙としてのボディのありようを示すかのように、メタフィジカルな読みを促すような趣向が凝らされている。

(15) こうして凍結されるロスについてジェフリーが思い描く身体は、文字どおりあらゆる臓器を剥ぎ取られた器官なき身体であるが、それは、Gilles Deleuze が提起した無限の生成を促すマトリクスとしての「器官なき身体」とは、似ても似つかないものである。だが、ジェフリーの意識において、ロスやアーティスが希求するマテリアルとしての器官なき身体は、そもそも形而上学的概念に他ならない後者の「器官なき身体」へと変貌を遂げていく。Antonin Artaud に触発され、Deleuze が発生生物学的発想から提起した「器官なき身体」とは、生物の唯物的なポテンシャルティを備えた、形態発生以前の波打ち渦巻く生命のありようを意味する。

(16) ジェフリーは、こうした「卵」を包む鞘を思わせるカプセルが整然と安置された部屋に案内され、そこに眠る「不動の人体に美を見出そうとする」。彼はまずもってそれらを、自分が先に目にしたカタコンベを思わせるマネキンのインスタレーションと重ね合わせる。遺跡から発掘された彫像のように頭部が切り離され、性別も人種も無化され、カプセルのコロニーを思い浮かべた次の瞬間彼は、眼前の光景を、驚異を湛えた氷結のアートとして想起しようとする。このことは、そうした躯体が、ナノテクによって縫合される機械仕立ての身体から、潜在的に生命の生成力を秘めた卵へと反転し得ることを意味している。最終的に彼は、凍結されたヒューマノイドたちが織り成す光景を、崇高にして「純粋なスペクタクル」として受容し、「畏怖と畏敬の念が入り混じった疼き」すら感じるようになる。

(17) 一見不気味なサイボーグかマネキンのように見えながら、それとは対照的に内側から光を放つように見える理想化されたアーティスの神々しい躯体を前に、ジェフリーは目を閉じて、かつて彼女が口にしたある情景に思いを馳せる。それは、アーティスが果てしなく数え続ける「シャワー・カーテンを転がり落ちる水滴」をめぐる逸話である。奈落へと零れ落ちるシャワーの「水滴に生命を吹き込み」、同化しようとするアーティスの営みは、死の地平にてまさにこれから開けゆく生の展開を想起させる。未だ定かな輪郭を持たず、微分的な速度の複合関係として彼女に降りかかる水滴の微粒子は、波打ち渦巻く生の始原的な素材の基底をなすがゆえに、無底の時間において無限大の潜在力をもって発生する身体のマトリクスとなる。

(18) このように主人公が想起するアーティスのたゆたう意識は、第一部と第二部の間に詩的な独立した章として挿入されている。微視的な物理現象を記述する量子力学において、絶対ゼロ度のようにエネルギーが最低の状態ですら、原子がゼロ点振動するように、アーティスは囁き続ける。生と死の間に宙吊りにされた彼女の朧げな意識の打ち震えは、まさにエントロピー・ゼロの「器官なき身体」のマトリクスをなしていると言ってよい。そこで幾度なく言及される言葉や声や時間と一体化した彼女は、カプセルの静寂の中で、シャワーの水滴さながら囁く微粒子と化していく。

(19) 以上、概観してきたように、DeLillo は、主人公を氷結の迷宮に誘うことにより、命のゼロ化が永遠性を獲得するという究極のバイオポリティクスの逆説を安易に彼に批判させることなく、地層学的な時間相へと読者を導く。その結果、「倫理的想像力」を重んじ、謙虚にささやかな日常の幸福を享受しつつも、ジェフリーは、生の驚異を湛えた氷結のアートが眠る大地の底で織りなされるアーティスの化身ともいべき無数の水滴の打ち震えに、波打ち渦巻く生のありようを発見していく。

(20) 本研究を通して、幸福の追求とヒューマン・エンハンスメントとの関係を模索する研究の行き着く先として、逆説的に人類の終焉を惹起しかねない「ポストヒューマニズム」の問題系が浮上した。それが単に人間中心主義の終焉を意味するのではなく、自らを構築する物質性により自らを変容させることを宿命づけられた人類のアポリアを浮き彫りにする魅力的な文学的テーマであることが判明した。そのような問題意識のもとに、今後の展望としてさらに分析対象を英語圏の現代作家に拡張するとともに、焦点を 21 世紀のポストヒューマン・フィクションに絞った研究領域が新たに射程に入ってきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- 1 渡辺 克昭、「ドン・デリーロの惑星的想像力の場としての“Convergence” 『ゼロK』における「ポストヒューマン・ボディー」とアース・アート」、『エコクリティシズム・レビュー』第11号、査読有、2018、pp.1-13
- 2 渡辺 克昭、「ドン・デリーロにおける死のデザイン オリエンタルな意匠をめぐって」、『ALA Journal』22号、査読有、2016、pp.29-55
- 3 渡辺 克昭、書評、下河辺美知子著『グロバリゼーションと惑星的想像力 恐怖と癒しの修辞学』、『アメリカ文学研究』第53号、日本アメリカ文学会、2016、pp.62-68
- 4 渡辺 克昭、「『幸福』のこちら側 Richard Powers の *Generosity* に見る Exuberance と Resilience」、『英米研究』第39号、大阪大学英米学会、査読有、2015、pp.31-55

〔学会発表〕(計7件)

- 1 渡辺 克昭、招待講演「デリーロ文学における微粒子 『ポイント・オメガ』から『ゼロK』へ」、『科研費・基盤研究(B)「マニフェスト・デスティニーの情動的効果と21世紀惑星的想像力」』、2018年2月19日、成蹊大学
- 2 渡辺 克昭、招待発表「囁き続ける水滴 『ゼロK』における「器官なき身体」」日本英文学会関西支部第12回大会、2017年12月17日、京都女子大学
- 3 渡辺 克昭、招待講演「ドン・デリーロの惑星的想像力の場としての“Convergence” 『ゼロK』における「ポストヒューマン・ボディー」とアース・アート」、『エコクリティシズム研究学会第30回大会』、2017年8月5日、サテライトキャンパスひろしま
- 4 渡辺 克昭、招待講演「破局と生成のアレンジメント デリーロ文学における微粒子とメディアの亡霊」、『京都大学大学院人間・環境学研究科』、2017年7月14日、京都大学
- 5 渡辺 克昭、日本アメリカ文学会東京支部シンポジウム「現代アメリカ小説における「保守」の諸相」講師、「生命の保守/保守の生命 デリーロの新作における永遠のゼロ」、『慶應義塾大学』、2016年12月10日、慶應義塾大学
- 6 渡辺 克昭、招待講演「ドン・デリーロにおける死のデザイン オリエンタルな意匠をめぐって」、『アジア系アメリカ文学研究会第24回フォーラム』、2016年9月25日、神戸大学
- 7 渡辺 克昭、平成26年度日本アメリカ文学会中・四国支部冬季大会シンポジウム講師「アメリカ文学における幸せの追求」2014年12月13日、広島県立大学

〔図書〕(計2件)

- 1 渡辺 克昭 他、金星堂、『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』、2018、386
- 2 渡辺 克昭、大阪大学出版会、『樂園に死す アメリカ的想像力と死のアポリア』2016、559

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 克昭 (WATANABE Katsuaki)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：10182908